

ASEAN各国で日本語スピーチ・コンテスト

日本在外企業協会（日外協）では、国際交流活動の一環として ASEAN 各国の日本語スピーチ・コンテスト優秀者を 1986 年以来毎年日本に招へいしており、これまでの累計は 300 人を超える。32 回目となる今年は 10 月 22 日(日)から 29 日(日)まで、企業訪問、日本文化体験、観光などを行う。また、26 日(木)には日本アセアンセンターで日本語スピーチ発表会を開催予定。

ASEAN 各国の日本語学習熱は高い。日本語スピーチ・コンテストも盛んに行われており、中には 40 年以上の歴史をもつものもある。

ここではフィリピン、カンボジア、インドネシアでの熱戦の模様を紹介する。(編集部)

フィリピン

2017 年 2 月 25 日(土)、第 44 回日本語スピーチ・コンテストがマニラにあるシャングリラプラザモールで開催された。

コンテストは学生部門、社会人部門、オープン部門の 3 つに分かれており、各部門から 1 位を選び、さらにその中から最優秀賞 1 人を選ぶ。今回は学生部門から 3 人、社会人部門から 3 人、オープン部門から 4 人が参加。参加者はマニラ、セブ、ダバオでの書類審査後、各会場での予選会を勝ち上がってきた。会場には参加者の応援団だけでなく、日本語に関心のある多くの人々が大勢詰めかけた。



優勝した
クインシアンさん
(中央)



今回の特徴は、発表者と日本語・日本文化等の関わり、日本とフィリピンの違いといった例年よく見られるテーマ以外を扱ったスピーチが半分と多かったこと。最優秀賞者もスピーチの出だしこそ日本のドラマの引用から始まったが、そこから自分の意見をしっかりと述べたことが受賞につながったと言える。

コンテストは中・上級者が対象で、前回よりも全体的にレベルが高かったという意見が多かったが、現在フィリピンの日本語学習者は初級レベルが半分以上を占めている。来年以降、初級レベルの学習者が参加できるような機会を設けることも考えていきたいと思う。

(国際交流基金マニラ 日本語上級専門家 武井康次郎)

カンボジア

5 月 21 日(日)に、プノンペンにあるカンボジア日本人材開発センター(以下、CJCC)のアンコール^{ミズナ}ホールにおいて、在カンボジア日本国大使館、王立プノンペン大学日本語学科、CJCC の共催で第 20 回カンボジア・日本語スピーチ・コンテストを開催した。応募総数 76 人の中から、原稿審査と電話インタビューを通過した第 1 部(日本に行ったことがない人)10 人、第 2 部(日本に行ったことがある人)5 人が当日スピーチに臨んだ。会場には発表者の友人、先生の他、日本語学習者など約 250 人が応援に駆けつけ、ホール内は緊張と熱気に包まれた。

第 1 部は、発表者自身の家族や先生との思い出などをもとにしたスピーチが目立ったが、第 2 部は、日本語の敬語の難しさや日本に滞在した際の



優勝したチャンソム
ナンさん
(右から2人目)



会場の様子

気付きなどユニークなテーマが目立った。第1部のディーリ・チャンソムナンさんは『愛をみせる瞳』というタイトルでスピーチ、「おばあさんとの何気ない日常の中から本当に大切なことを見出した」という心温まるスピーチの内容が評価され、見事優勝した。

今回のコンテストで本選に残った15人は、主に高等教育機関で日本語を学ぶ学生たちだった。来年度は年齢・職業を問わずより多くの人々に参加してもらい、カンボジアの日本語教育全体を盛り上げていけるよう、1年かけてじっくり取り組んでいきたいと考えている。

(カンボジア日本人材開発センター JF 講座調整員
新倉真希)

インドネシア

今年もインドネシアに日本語弁論大会全国大会の季節がやってきた。

この大会は大学生と一般の日本語学習者を対象としたもので、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターがインドネシア元日本留学生協会(プルサダ)および研究・技術・高等教育省と共催。日頃の日本語学習成果を発表する場であるとともに



優勝した
アルベルトさん



に、日本の文化や社会、また日本とインドネシアの関係、ひいてはインドネシアそのものについて自ら学び、考える機会となることも期待して実施している。その歴史は長く、1970年から開催されており、今回が第46回目の大会となった。

今年は、共催者である研究・技術・高等教育省内ホールにて、7月22日(土)に開催された。参加者は、全国計9地区の地区予選を勝ち抜いてきた計14人。本大会では、スピーチの内容・文法・当日の発表方法などの他に、スピーチ後の日本語専門家からの日本語でのインタビューも審査対象となる。

年々参加者のスピーチのレベルが上がっており、各地の予選を勝ち抜いてきた参加者の発表は甲乙つけがたいものであった。その中で優勝を手にしたのは東ジャワ州代表として出場したアルベルトさんで、タイトルは「地上の最強の力」だった。彼は子どものころ日本語のゲームをきっかけに日本語に興味をもち、大学も日本語を専攻。なかなか就職できなかった時期も日本語の勉強を続け、晴れて日系企業に就職でき、今では重要な仕事を任せられるまでになったそうである。その感謝の気持ちから、現在では同僚にボランティアで日本語を教えているとのこと。彼にとっての「地上最強の力」である日本語で、初めての日本行きの切符を手に入れた。日本での体験が彼にとってまた新たな「力」となることを期待している。

最後に、本大会の実施に協力いただいた皆様に深く感謝申し上げるとともに、本大会を通して、日本と日本語に興味をもつインドネシア人の方が増えることを切に願っている。

(国際交流基金ジャカルタ日本文化センター 矢島香織)